

平和文化研究 第 41 集 (2021 年 3 月)

ポスター, 要塞都市長崎の地図,
海がつないだ長崎の歴史年表

上 藺 恒 太 郎 (編)

長崎総合科学大学

長崎平和文化研究所

Cover Artwork: Seiryō Ikawa

都市の記憶 VI,VII 関連資料 :
ポスター, 要塞都市長崎の地図,
海がつないだ長崎の歴史年表

上 藺 恒 太 郎 (編)

概要

長崎平和文化研究所は、2021 年 1 月 10 日および 17 日に、都市の記憶講演会 VI,VII,をおこなった。また、2 月 23 日には都市の記憶講演会 VIII を、それぞれ Web 講演としておこなった。その際の資料として、ポスター、要塞都市長崎の地図、教会の歴史と要塞都市長崎を考える年表を、海がつないだ長崎の歴史年表として掲載する。

目次

都市の記憶 VI, VII, VIII のポスター.....	48
要塞都市長崎の地図	49
海がつないだ長崎の歴史年表	50
文献.....	62

都市の記憶 VI, VII 関連資料：ポスター、要塞都市長崎の地図、年表

長崎平和文化研究所主催

NAS 長崎総合科学大学

都市の記憶 VI/VII/VIII

長崎が被爆都市として世界に重要な町であり、要塞都市だった中世の最初の姿がまた世界に意味のあることを、学問の背景からご理解いただきながら、長崎の地域再生について考えます。

入場無料
Zoomで
ご参加
ください。

1/10
(日)
14時-16時

■イエズス会本部と長崎—長崎開港450年を振り返って—
デ・ルカ・レンゾ 神父 (Web講演)
(イエズス会日本管区長、前日本二十六聖人記念館館長)
会場：長崎市立図書館 多目的ホール (長崎市興善町1-1)

1/17
(日)
14時-16時

■要塞都市長崎 (Web講演)
安野 眞幸 氏
(著書：『港市論 平戸・長崎・横須浦』『世界史の中の長崎開港』等)
会場：長崎市立図書館 多目的ホール (長崎市興善町1-1)

2/23
(火)
14時-16時

■被爆建造物の保存—広島事例、長崎への助言 (Web講演)
石丸 紀興 氏
(広島・平和・地域再生研究所主催)
会場：総合資格学院 (長崎市江戸町6-5 センタービル)

【お願い】新型コロナウイルス感染拡大防止のために。
状況によっては、Web講演への切り替え、または中止もあり得ます。

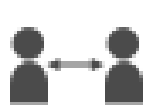
事前登録制です


Web参加が可能です


体調不良の方はご遠慮ください


マスクの着用にご協力ください


手洗いの励みにご協力ください


距離を空けてください


申込先 **長崎平和文化研究所** ☎095-838-4835 (所長室) / 095-838-5128
①お名前 ②ご住所 ③ご自分のメールアドレスまたはFax番号 ④どの回か(複数可)をお書きいただき、
下記のメール又はFax宛てにお申し込みください。講演はWeb (Zoomを予定)でもご参加いただけます。
メール: peace@NIAS.ac.jp
Fax : 095-839-0584

堀と川に囲まれ，要塞化した長崎のイエズス会本部

(西村敬一氏作成)



○右上方にイエズス会本部，2つの川と3つの堀を，出島築造後の江戸期の地図に示した。

○場所の記憶例：1596年第三の堀ができ，その外側，1609年村山等安が寄進した土地にサント・ドミンゴ教会が5年間存在し，後，末次平蔵はじめ末次家が長崎代官だったが1676年密貿易が発覚し失脚，高木作右衛門が代官として屋敷を構えた。旧，勝山小学校，現，桜町小学校。

海がつかない長崎の歴史年表

ー長崎開港と要塞都市長崎関連ー

(2021 年 4 月 8 日)

長崎の教会・・・日本二十六聖人記念館長 結城了悟(1960 年に長崎, 2004 年まで館長をされた)の「長崎の教会」の文章を年表風に改めた。また末尾の参考文献などにより, 日本とヨーロッパの関連事項を*で加え, さらに中国の動きを+で記した。海の繋がりを知るためである。関連事項は時代を想起するために書き込んでおり, 数値など詳細まで確定されてはいない。誤りもあるかと思う, ご教示願いたい。

上 薗 恒 太 郎

- * 1474 この年の遣明船は坊津に寄港し, 硫黄(黒色火薬の原料)を積んで, 島津氏警護のもとに渡航。
- * 1488 年バルトロメウ・ディアスがアフリカ南端の喜望峰に到達。ポルトガル海洋帝国への道が開かれる。
- * 1510 ポルトガル王国のインド総督アフォンソ・デ・アルブケルケがゴアを占領。
- * 1511 ポルトガル, マラッカ(マレーシア)を戦闘の末にムスリムから占領。
- * 1517 ポルトガルのトメ・ピレス一行が広州に来る。
- * 1522 広州からポルトガル勢力, 駆逐される。このとき明は, 押収した大砲が二段式の後装銃で性能の高いことを知り, 翌年から自前で製造開始。
- * 1523 寧波の乱(寧波争貢事件)。大内氏の遣明船派遣を知った細川氏は無効となった勘合符を持って追走。寧波の市舶司に細川氏の手続きを先におこなわせ, 怒った大内氏側は細川氏の正使を殺害, 沿道で放火・殺戮, 取り締まりの明船を奪って日本に逃走した。大内氏の背後に博多商人, 細川氏には堺商人がついていた。このとき細川氏の遣明船を警護したのは島津氏, 種子島氏であった。
- * 1527 石見銀山。博多の神谷寿貞が大内義興の支援と三島清右衛門の協力を得て, 銀を掘り始める。
- * 1529 ポルトガルとスペインはローマ教皇に仲介を依頼して 1494 年にトルデシヤス条約, 1529 年にサラゴサ条約を締結。サラゴサ条約は, ポルトガル王ジョアン 3 世と神聖ローマ皇帝カール 5 世の間で締結された。サラゴサで締結された条約は, 大西洋の子午線から西はカスティーリャに, 東はポルトガルに帰属するとした。ポルトガルはアジアを含む土地と海を領有, スペインは太平洋の大半を領有。
- * 1533 神谷寿貞が朝鮮半島由来の灰吹法によって銀の効率的精錬を始める。この技術が日本全国の鉱山に伝えられ, 日本の銀産出量が増えていった。概略を知る数値として, 日本の銀の産出量は世界全体の 3 分の 1, 年間平均 200 トン程度、そのうち石見銀山が 38 トン程との推察がある。灰吹法は銀をいったん鉛に溶け込ませて抽出する方法であったため, 鉱夫は酸化鉛の粉塵を吸い込んで急性または慢性の鉛中毒を発症し, 劣悪な鉱山環境と相まって短命だった。

1530 年代末から始まる日本の大量の銀輸出によって中国からは生糸(白糸)がもたらされ, 多い年には年間 200 トンもの銀が輸出される, 当時世界最大規模の二地域間交易であった。このルートは, 17 世紀後半日本で銀輸出が制限されてからも, 対馬を経由した朝鮮ルート, 薩摩藩を経由した琉球ルート, 東南アジアを経由するマカオルートの三方向に実質的に継承された。この交易網に接続して, インド洋をめぐる沿海交易, アラビア湾一帯の交易網が続き, さらに東アフリカ沿海交易圏と地中海交易圏につながっていた。

銀は, 貿易の支払いに使われただけでなく, 金と銀の中国や日本の価格差によって動かされ, 東南アジア各地

では、日本に対して金を輸出して銀を購入し、中国に対して銀を輸出して金を購入することにより、二重の利益を得ることができた。

アンドレ・グンダー・フランクは世界市場の銀を、次のように描く:宋代、元代、明代の大部分を通じて貨幣材となる金属の輸出の方向は圧倒的に、銀と銅が中国から日本へ、金が日本から中国へと流れた。しかし 16 世紀以降この流れは反転し、日本は銀、後には銅の主要な輸出者に、そして金の輸入者になった。中国では金／銀比率が上昇した時期があったが、しかし、中国の金／銀比率は通常世界のどの場所よりも低く、銀価格がはるかに高かった。1592 年から 17 世紀の初頭にかけて、広東では金は銀に対して 1 対 5.5 から 1 対 7 の比率で交換された。他方スペインではその比率は 1 対 12.5 から 1 対 14 で、銀価格は中国でスペインの 2 倍した。1590 年代には金／銀比率は日本で 1 対 10、ムガル帝国のインドで 1 対 9、中国の銀の価格が 2 倍近くも高く、銀は中国に引き寄せられ、金と交換されてヨーロッパに輸出された。1600 年頃のポルトガル人の覚え書きによると、マカオと日本の間の貿易で 45 パーセントの利益が得られたという。

* 1534 イエズス会(カトリックの男子修道会)がイグナチオ・デ・ロヨラ、フランシスコ・ザビエルらによって創設される。

* 1538 年ごろから日本銀の朝鮮半島への輸出が始まり、1540 年頃から灰吹法による増産により急増。1540 年代には中国船の九州方面への来港が盛んとなり、日本銀を入手した。

* 1540 幕府の使船と称する船が銀 8 万両を朝鮮へ運ぶ。

* 1540 イエズス会がローマ教皇パウルス 3 世により認可される。

* 1542 ジャンク船に乗ったポルトガル人が日本の種子島に漂着、鉄砲を伝える。この船主は王直。

種子島で制作された鉄砲は、坊津、平戸、豊後、和泉堺でも制作された。種子島氏は紀州熊野を信仰し、南海路と呼ばれる堺から薩摩への直通ルートが開かれており、鉄砲は堺に直接伝えられた。

+ 1545 王直、博多の助左衛門ら 3 人を寧波沖の双嶼港(リャンポー、密貿易港)に連れ込み、いらい日本からの来航が増加。

* 1545 ペルー(現在のボリビア)のボトシ銀山発見。スペインはこの銀をヨーロッパに運び、価格革命をもたらしたと言われる。また、中国貿易に使われ、スペイン銀として大量に流入し、明で流通した。

* 1548 メキシコのサカテカス銀山発見。19 世紀まで世界の銀の 20%ほどを産出。このメキシコ銀は太平洋のアカプルコ貿易で、フィリピンから中国に運ばれた。

* 1548 年、ヤジロウ(アンジロウ)がゴアにおいて、聖霊降臨祭にボン・ジェス教会で日本人として初めて洗礼を受け、聖パウロ学院でキリスト神学を学んだ。1549 年に彼はザビエルに従ってゴアを離れ、1549 年 8 月に鹿児島に上陸。

* 1549 年 4 月 15 日、フランシスコ・ザビエルは、イエズス会士コスメ・デ・トーレス神父、フアン・フェルナンデス修道士、マヌエルという中国人、アマドールというインド人、ゴアで洗礼を受けたばかりのヤジロウら 3 人の日本人とともにジャンク船でゴアを出発、日本を目指した。

* 1549 年、フランシスコ・ザビエルは、ヤジロウの案内で薩摩半島の坊津に上陸。許しを得て、1549 年 8 月 15 日に現在の鹿児島市祇園之洲町に着く。

* 1549 年 9 月に、伊集院城(一宇治城/現・鹿児島県日置市伊集院町大田)で薩摩国の守護大名・島津貴久に謁見、宣教の許しを得た。

* 1549 日本から大内氏による最後の遣明使節派遣、正使は策彦周良、臨済宗の僧であり外交官(遣明船は初歩的コンパスを利用したと考えられる)。1557 年大内氏滅亡によって、1401 年から 19 回にわたる日明貿易が途絶える。以後この航路の権益は島津氏発展の基盤となった。

宝徳年間(1449～1452, 室町幕府足利義政の時代)に明に渡った商人楠葉西忍は、明で購入した糸 250 文が日本で 5 貫文(=5000 文)で売れ、日本から銅 10 貫文の 1 駄が明で 40-50 貫文で売れたと記す。

*1549～50 年 ポトシ銀山で銀ブーム。キリスト教教化を条件に現地人労働力を実質的な奴隷として使役することを可能にしたスペイン殖民地でのエンコミエンダ制によって労働者が確保された。

1550 フランシスコ・ザビエル, 1550 年 8 月末頃に鹿児島から船で西九州の海岸に沿って樺島に着き、そこから平戸へ赴き、平戸で数人に洗礼を授け、その信者の共同体をコスメ・デ・トーレス神父に任せた。つづいて、バルタザル・ガゴ神父, ガスパル・ヴィレラ神父, イルマン, ルイス・デ・アルメイダなどがその教会を育てた。ガゴ神父から洗礼を受けた籠手田家は、平戸の教会の柱となった。

*1550 フランシスコ・ザビエルが平戸を訪れる。藩主松浦隆信は布教活動を許す。しかし藩主自身は曹洞宗の宗徒であった。

*1553～1561 年、平戸は、ポルトガル船来航により交易地として栄えた。

+1553 王直は、明の攻撃をうけて五島列島に拠点を移し、自身は松浦隆信の保護のもと部下 2000 人と平戸に住んだ。

*1557 ポルトガルが、中国のマカオに居住権を獲得し、要塞を築いた。

*1557 戦国大名としての周防大内氏滅亡。後、対馬の宗氏は、豊臣政権による日本全国平定でその事実を隠せなくなるまで、朝鮮側に隠して大内氏の偽使を派遣して通交の独占を図った。

*1558 松浦隆信が宣教師ガスパル・ヴィレラに平戸からの退去を命じ、仏教徒が教会を焼討する事件がおこり、1561 年にはポルトガル人殺傷事件(宮ノ前事件)が発生、ポルトガル船は横瀬浦に移動。

*1562 (横瀬浦) 大村純忠はポルトガル貿易のために横瀬浦を提供、あわせてイエズス会士に住居を提供するなど便宜をはかった。

1562 ルイス・デ・アルメイダをはじめトーレス神父, イルマン, ジョアン・フェルナンデスが 1562 年 7 月に横瀬浦の教会を育てた。そこからその年の暮れには平戸の根獅子, 生月, 度島に布教した。

1563 年には横瀬浦から宣教が広がり、西彼杵半島の村々の主だった人々が洗礼を受けていた。

1563 年 4 月には、ルイス・アルメイダが有馬領内に入り、島原と口之津に教会を開いた。

1563 6 月初めごろ大村純忠と 20 名の家臣たちが横瀬浦の教会で受洗。

*1563 大村純忠は家臣とともにコスメ・デ・トーレス神父から洗礼を受けた。

1563 秋に横瀬浦が破壊され、トーレスは口之津に移り住み、そこから布教活動に対して指導を与えた。

*1564 松浦隆信がポルトガル船の再入港を促し、教会も再建された。しかし翌年にはキリシタン大名となった大村純忠の領地である福田浦にポルトガル船は去った。

1564 年、福田と平戸に教会が完成。

1565 年、アルメイダとイルマン, ロレンソによって五島の福江と奥浦に教会が建てられた。

福田の信仰の火花が戸町へと飛んだ。こうして長崎教区の全地域に福音が宣べ伝えられた。

1567 年、大村純忠は口之津にいたトーレス神父を訪れ、その話合いの結果、ルイス・デ・アルメイダは長崎に入り、すでに信者であったベルナルド長崎甚左衛門から土地と小さな寺を受けた。

+1567 明が海外貿易のために月港開港。

1568 年 トーレスも長崎を訪れ、福田の宣教師ヴィレダ神父を長崎に任命し、自分は大村に移った。

1568 トーレスは大村で 12 月 8 日、無原罪の聖母に捧げられた教会を三城城の麓に開いた。

1569 長崎でのヴィレラの宣教は効果的で、1569 年 11 月 1 日諸聖人に捧げられた教会が完成した。「小さくて美しい」その教会に 1570 年の春にはトーレス神父も移り、いろいろの試練を乗り越えて信仰を守り続けた大村純忠が、トーレス神父を見舞いに訪れている。ザビエルが平戸に着いてから 20 年目には、現在の長崎教区

の至る所で布教が行われた。

＊1569 長崎甚左衛門純景は、長崎最初の教会トードス・オス・サントスの建立を許可し、自らも入信。

1570 そうした活動の結果、1570 年7月には、来日した新しい布教長フランシスコ・カブラル神父が天草の志岐（苓北町）で宣教師会議を開き、その会議で長崎の新しい町と港の問題が協議決定された。

1570 年 10 月にトーレス神父が志岐において聖なる死を遂げた頃、フィゲイレド神父は福田から長崎湾に入り、トラバソス船長と一緒に新しい港の位置を決めた。

1571 (岬 の 教 会) 年 の 春 に は 、 大 村 純 忠 の 家 老 朝 長 対 馬 守 が 長 崎 の 最 初 の 六 か 町 を 開 いた 。 トーレス神父は、大村純忠と話し合った時、他の地で迫害されていた信者たちに分け与えるため一つの土地を頼んだ。それは長崎の静かな海に突き出ている松と藪で覆われた細長い岬であった。そこに朝長が最初の町をつくり、その先端の所(旧長崎県庁跡地)にフィゲイレド神父は小さな教会を建てた。聖母マリアに捧げられたこの教会は次第に大きくなり、日本の教会の中心となるまでに発展する。

＊1571 年、有馬晴信は、兄の有馬義純が早世したため 5 歳の時に家督を継承。肥前守護でもあった大友宗麟（義鎮）に従っていたが、龍造寺隆信やその支援を受けた西郷純堯・深堀純賢兄弟の圧迫を受けて、龍造寺隆信に臣従せざるを得なくなる。

＊1571 ポルトガルが、マカオー長崎航路を開設。中国産の生糸・絹織物を日本で売り、銀を持ち帰る。当時、長崎から毎年、50～60 万両の銀がマカオに搬出されたという。

＊1571 ポルトガル船が長崎に初めて入港、町建てが始まる(6 か町)。六町は、大村町、島原町、外浦町、文知(分知)町、平戸町、横瀬浦町。人口 1,000～1,500 人。

＊1571 年頃 末次興善は博多での度重なる戦火を避けて長崎に移住、次男、末次平蔵(政直)が同行。興善は、コスメ・デ・トーレスから洗礼を受け、取引の本拠と家博多に置き、長崎、堺、秋月にも家を持ち、堺の数寄屋は有名だったという。長男、宗徳は通常博多に、次男は長崎に住んだ。宗徳は海外貿易商として博多本店で黒田氏の貿易品を調達。末次興善の名は長崎市の興善町に残る。

+ 1571 スペインがフィリピンで植民都市マニラを建設し、アカプルコ(メキシコの太平洋岸)とマニラの間でガレオン船貿易を始める。このメキシコ銀によって、中国商人から絹織物や陶磁器などを買った。日本の銀はこれに押されて衰退する。

＊1572 ポトシ銀山(南米、現ボリビア)再興のため、水銀アマルガム法(銀鉱石を粉碎した粉末に水銀を加えて泥状にし、沈殿した水銀アマルガムを加熱して銀を分離)、ならびにミタ労働制度(16 の地区のインディオ、18 歳から 50 歳までの男子の7分の1を、1年交替で働かせた)を導入して、銀生産量を急速に増やし、再び大量にヨーロッパに銀をもたらした。その結果ヨーロッパの銀価格が下落し、急激な人口増加もあって物価が2～3 倍に高騰、地代収入に依存する領主階級が没落し、封建社会の崩壊が速まった。

＊1572 年、大村純忠の三城七騎籠。松浦氏らの援軍を得た後藤貴明(大村純前の実子だが武雄後藤氏の養子になった)の軍勢が純忠の居城である三城城を急襲、援軍が来るまで持ちこたえた。

＊1577 大村純忠には洗礼名を持つ 4 人の息子、喜前(サンチョ)、純宣(リノ)、純直(セバスチャン)、純栄(ルイス)がいたが、1576-1577 年頃は龍造寺隆信の圧迫を受け、喜前を除く 3 人を人質に取られるなど、従属状態にあったという。

＊1578 年大友家当主・大友義統と父・宗麟は日向の伊東義祐の要請を口実に大軍を率いて南下。しかし日向高城川(小丸川)で、島津義久軍に大敗(耳川の戦い)。それまで大友家に従属していた肥前の龍造寺隆信が離反して自立。また、筑前でも秋月種実や筑紫広門らが離反して島津に転じた。さらに大友庶家の重鎮である田原親宏や田原親貫、田北紹鉄らも大友家に対して反乱。

＊1578 長崎港が龍造寺軍らによって攻撃されると、大村純忠はポルトガル人の支援によって撃退。

- *1579 ヴァリニャーノが当時の東インド管区の東端の日本(島原半島, ロノ津港)着。
- +1580 年代 明の税制である一条鞭法が中国全土に普及した。あらゆる賦税と徭役を一本化して銀納にした税制であったため、銀の流通が一層促進された。
- *1580 年頃ポルトガル船は毎年 5 千貫(18,750 キログラム)ほどの銀を日本から持ち出し、大部分を中国に運んだといわれる。
- *1580 年に大友家は織田信長の仲介のもと、島津義久との間に「豊薩和睦之儀」を結ぶ。
- *1580 年までに龍造寺隆信は筑前国や筑後国、肥後国、豊前などを勢力下におく。
- 1580 年には、アレッサンドロ・ヴァリニャーノ神父が長崎を訪れた時、新しい港町は 400 戸ぐらいの町で、二つの教会、トードス・オス・サントスと被昇天の聖母の教会があった。
- *1580(イエズス会領長崎)年に、大村純忠は長崎と茂木をイエズス会に教会領として寄進。
- *1580 長崎甚左衛門純景は、反キリスト教の西郷純堯、深堀純賢兄弟による襲撃に悩まされ、純忠の薦めにより長崎をイエズス会に寄進して、所領を失い、長崎郊外の所領だけが残った。
- *1580 年ヴァリニャーノの Regimiento para el Superior de Japon「日本上長のための指針」(デルカ レンゾ神父提供による史料)には、「私[ヴァリニャーノ]はイエズス会を代表して[大村殿からの]寄進状を受けました。そして、1580 年から 1587 年まで、神父たちは、ポルトガル人商船の荷物全体の価値から、1 日にまとめて支払った 700 デュカートを受けとっていた。それとは別に[大村氏の]大臣から、日本人が購入した税金を徴収した分を、我等の関与なしに収集した。そして、[長崎]港の管理のため、神父たちはドン・バルトロメ承諾の上、裁判官を任命しました」「キリスト教界と神父の善及びその保全のために、ポルトガル船が通常寄稿する長崎の港が十分に強化され、弾薬、武器、大砲、その他の必要なものが備えられていることは非常に重要です。同じように、茂木の要塞が安全に備えられることが重要です。[茂木は]は、大村と高来の通路であり…」と書いてある(一部改変)。なお、長崎のイエズス会本部の財政基盤について、末尾文献の高瀬弘一郎を参照。
- *1580~ イエズス会は、堀、大砲で武装、高台と低地の境には石垣を築く。内町 11 町。
- *1580 スペインのフェリペ2世がポルトガル王位を継承したため、同君連合となり、実質的にポルトガルはスペインに併合された。
- 1580 年 大村純忠が後に内町と呼ばれた港町をイエズス会に寄進したので教会は更に発展した。
- 1581 年 岬の教会は増改築された。
- *1581 修道院に司祭 3 名、修道士 1 名が駐在し、さらに修道士 3 名が追加される。
- *1581 ヴァリニャーノ、イエズス会員のための宣教のガイドライン、『Il Cerimoniale per i Missionari del Giappone (日本の風習と流儀に関する注意と助言)』を執筆。
- *1582 本能寺の変、織田信長死す、
- *1582 (天正遣欧少年使節)伊東マンショ、千々石ミゲル、中浦ジュリアン、原マルティノの 4 少年が大友義鎮(宗麟)・大村純忠・有馬晴信の名代としてローマへ派遣された。イエズス会員アレッサンドロ・ヴァリニャーノの発案といわれる。
- *1582 マテオ・リッチ、マカオに上陸。中国名、利瑪竇。広州で布教、1601年に北京に赴き、神宗万曆帝に拝謁、キリスト教布教に止まらず、実用的な科学技術を伝え、1610 年に北京城内に葬られた。
- 1583 年一人の信者ジュスティノ・カサリアの努力によってミゼリコルディアの組が設立され、その本部が興善町に置かれ、そこに聖堂ができた。
- *1583 龍造寺家晴は筑前、肥前、筑後並びに肥後の兵を率い、島津忠平(義弘)は伊集院、新納、樺山、喜入等の手勢を集め、高瀬川(現・菊池川)を挟んで対峙。1584 年に両者和睦し、高瀬川より巽(東南)を島津領、乾(北西)を龍造寺領と定めた。

+1583 女真族のヌルハチ(清の初代皇帝、太祖)挙兵。

1584 年には長崎の教会に大きな影響を及ぼしたもう一つの出来事があった。有馬晴信が自分の支配下にあった浦上地方をイエズス会に与えた。この時から浦上の村々がキリシタンになった。何時からか明らかではないが、この頃より長崎では信者の信心を集める二つの巡礼地があった。一つは立山の麓にあったサンタ・マリアの小聖堂で市民の憩いの場所でもあった。もう一つは、浦上川の辺に建てられたサンタ・クララ小聖堂で船員たちに特に親しまれていた。

*1584 年に有馬晴信は島津義久と通じて沖田畷の戦いで龍造寺隆信を滅ぼす。

*1584 毛利輝元が豊臣秀吉に服属し、石見銀山の銀が秀吉の資金源になる。

*1585 秀吉は四国討伐の最中、関白宣下を受けた。

1585 年、岬の教会は手狭になって、更に大きな教会の建設のため工事がすすめられた。しかし、工事半ばにして1587 年豊臣秀吉の禁教令が發布された。

*1585 司祭 4 名と修道士 2 名が駐在。教会は 2,3 度増築したが、さらに大きい教会を建てることにする。

*1585 天正遣欧少年使節、ローマ教皇グレゴリウス 13 世に謁見。

*1585 長崎ーマカオ間のポルトガル船による貿易量が 500,000 両。

*1586 年、豊後の大友宗麟は秀吉に大坂で面会し、島津義久が侵略してきたことを訴え救援を求めた

*1586 年 10 月中旬に島津義弘(義珍)の 3 万の軍勢が肥後路から、島津家久の 1 万が日向路から、豊後への侵攻を開始。

*1586 秀吉、豊臣の姓を賜り、12 月に太政大臣に就任、豊臣政権を確立。

*1586 7 月、豊臣秀吉が九州征伐開始。

*1586 年末、秀吉は家康を上洛させて臣従を確認すると、1587 年から大軍を九州に差し向けた。

*1587 島津家久率いる島津勢と、大友義統ら大友軍のほか秀吉が援軍の先発隊として送り出した讃岐の十河存保、土佐の長宗我部元親・信親父子、軍監の讃岐高松城の仙石秀久、そして長宗我部元親・信親父子、仙石秀久、十河存保が率いる豊臣勢の間で、戦い。この合戦は九州平定の緒戦で、豊臣勢が敗退。

*1587 年、豊臣秀吉の九州平定において、大村氏は秀吉に従って、19 歳の嫡子・喜前が代理として出陣、本領を安堵された。純忠、55 歳で死す。

*1587 有馬晴信は、豊臣秀吉による九州平定において、島津氏から離れ、豊臣勢に加わった。

*1587 宗氏は、豊臣秀吉の九州平定に際して事前に臣従を決め、本領安堵された。

1587 年 6 月 19 日 豊臣秀吉、バテレン追放令。

しかし、禁教令にも拘わらず長崎の教会は生き残った。岬の教会は1590年まで閉鎖されたが、イエズス会員はトードス・オス・サントスとミゼリコルディアの組の教会を利用していた。

*1588 非常に大きくすばらしい教会を建てる。修道院を併設。

*1588 刀狩令發布。海賊停止令發布。

1590 年、岬の新しい教会は遂に 1590 年に完成した。しかし、2年後、秀吉の命令によって取り壊された。

*1590 長崎の人口 5,000 人。

*1590 天正遣欧少年使節、長崎に帰港。帰国する遣欧使節を伴ってヴァリニャーノが 2 度目の来日。使節らの持ち帰ったグーテンベルク印刷機によって日本語書物の活版印刷が初めて行われた。

*1591 天正遣欧少年使節が聚楽第において秀吉に西洋音楽(ジョスカン・デ・プレの曲)を演奏。

*1591 対馬では、秀吉の朝鮮出兵(文禄・慶長の役)に先立つ 1591 年、中継基地として厳原に清水山城、上対馬の大浦には撃方山城が築かれた。対馬の宗義智は朝鮮出兵で 5,000 人を動員した。

*1592 被昇天の聖母教会と修道院が破壊され、材木は名護屋に運ばれる。

- *1592 一ノ堀を掘削(地図参照, 堀町の名があった。また本博多町と大村町の間に小さな一ノ堀が掘削された)。
1592 年には上町にサン・ラザロ病院がロケ・デ・メロ司令官の寄附によって建てられ、ミゼリコルディアの組がその経営にあたっていた。病院には付属の聖堂もあった。
- *1592 朱印船貿易を、秀吉が京都、長崎、堺の豪商に許可。村山等安が長崎の御免地以外の直轄地の支配を任される。
- *1592 豊臣秀吉の第一次朝鮮出兵。秀吉は国内統一の余勢を駆って 16 万の軍勢で「唐入り」、初戦は大勝利、ソウルを落とし、平壤を奪う。2 回の朝鮮出兵で、明は捕虜となった日本兵から新式銃を得て鍛鉄製に切り替えたという。朝鮮も、降伏した日本兵から火薬・鉄砲の技術を取り入れたという。
- 1593 年 岬の教会は壊された1年後、再び許されて建て直された。傍らにはイエズス会の本部(修道院)が出来上がった。
- 1594 年聖ペトロ・バプチスタらが長崎を訪れた時、上町のサン・ラザロ病院、ミゼリコルディアの組が経営にあたっていた病院付属の聖堂を利用した。また、同じころ浦上の入口にもう一つのサン・ラザロ病院がイエズス会によって建てられ、そこにも小聖堂があった。
- *1595 長崎の人口 8,000 人以上。
- 1596 (26 聖人殉教)年、イエズス会本部は、日本の司教ドン・ペドロ・マルティンスを迎え、一時司教座でもあった。この長崎の教会は 1597 年 2 月 5 日、二十六聖人の証しを見た。殉教者の列が浦上のサン・ラザロの側(坂本町山王神社)に一休みし、その聖堂でパウロ三木たちが誓願を立てた。殉教者たちは尊い血をもって西坂の丘を潤した。その時以来、西坂は「聖なる山」または「殉教者の丘」と呼ばれ、信者たちの手によって殉教地は長崎で最初の公園となった。マルティンス司教は岬の教会の修道院の窓から殉教の場所を見ていたと言われる。彼は、その日の夕暮れに西坂まで行き、十字架の前で、祈りを捧げたが、やむを得ず日本を離れなければならなかった。殉教の少し前には司教は大村を訪れ、信者に堅信の秘跡を授けた。二十六聖人の殉教は長崎の教会の滅びではなく、新しい発展の起点であった。
- *1596 サン=フェリペ号事件(スペインのガレオン船の土佐への漂着)。
- *1596 二ノ堀(桜町と豊後町の間)、三ノ堀(代官屋敷と内中町の間)を掘削(地図参照)。
- *1597 豊臣秀吉、第二次朝鮮出兵(慶長の役)。
- 1598 年、秀吉が亡くなり、新しい司教ドン・ルイス・セルケイラとヴァリニャーノ神父が長崎に着いた。一時、司教は天草に居たが、すぐに長崎に戻り、岬の教会の側に司教館を設け、そこで大神学校を開いた。また、ヴァリニャーノの指導の下に岬の教会が改築された。
- *1598 岬の教会に、学院、神学校と印刷所が移される。
- *1599 副管区長と巡察師が駐在する修道院(イエズス会本部)に 30 人の聖職者が居住し、90 人の少年がいる神学校を併設。
- *1599 長崎ーマカオ間のポルトガル船による貿易量が 400,000 両。
- *1600 関ヶ原の戦い。
- *1600 宋義智は、関ヶ原の戦いでは西軍に加わったが許され、以後徳川氏に臣属し、代々李氏朝鮮に対する外交窓口としての役割を担った。
- *1600 徳川家康は、11 月に石見銀山を摂取し、銀山を含む地域を幕府直轄領(天領)とした。
- *16 世紀末から 17 世紀初頭、日本の銀は世界の産出量の 3 分の 1 から 4 分の 1 を占めたと考えられ、15 世紀から減少した中国の銀に代わって、明がモンゴルなどとの戦いを進める必要から、中国にもたらされた。16 世紀後半からは、スペインによる新大陸の銀が中国貿易に使われた。
- *1600 年前後の日本銀は、長崎ーマカオ間のポルトガル人や密貿易によって運ばれ、年間 50 から 80 トン、中

国に流入する外国銀のおよそ半分と推定される。

+17 世紀に気候の寒冷化による農業生産の減少と飢饉が発生する。

*1600 イギリス東インド会社設立(1874 まで)。航海の都度出資を募り、航海が終わるたびに配当、清算を行い、終了する株式会社の初め。

*1601 六か町最初の火事。

1601 年セルケイラ司教の司式により改築された岬の教会の献堂式が行われた。

1601 年の秋、この教会で初めて 2 人の日本人、イエズス会のセバスチャン木村とルイス・ニアバラが司祭として叙階された。この頃、大村と有馬にも立派な教会が建立された。

1601 年から 1614 年までは、長崎の教会の黄金時代である。セルケイラ司教の賢明な指導の下に市内の教会はその数を増し、典礼などはトレントの公会議の決定に従って行われた。この 13 年の間に 7 人の教区司祭が叙階され、4 人は主任司祭に任命された。他の 2 人は助任、残る 1 人は司教秘書であった。最初の小教区は山のサンタ・マリア教会で、主任はミゲル・アントニオ神父、第二はサン・ジョアン・バプチスタ教会(サン・ラザロ病院側、現・本蓮寺)で、主任はパウロ・ドス・サントス神父。

*1601 非常に大きく壮麗な協会が完成。日本最大の修道院を有し、附属する司教館に 54 名の聖職者が住み、全管区を掌握する副管区長と巡察師が駐在。三層(4 階建)の教会、修道院、学院、進学校、カーザ(生糸倉庫)、印刷所などがあつた。

*1601 長崎ーマカオ間のポルトガル船による貿易量が 1,000,000 両。

*1602 オランダ東インド会社設立(1800 まで)。継続的な資本を維持した最初の株式会社。法人、出資者の有限責任、持分の自由譲渡、所有と経営の分離、出資者による所有といった、近代システムの誕生と見なせる。これに対して、貿易を制限して許す朱印船貿易、朝貢制度は、対抗できる視野がなかっただろう。株式会社システムにより、植民地獲得のための戦費などを大きく集めて世界に乗り出すことが可能になった。

*1603 ヴァリニャーノ、巡察を終えて日本を去る。1606 年マカオで生涯を閉じる。

*1604 朱印船貿易を、家康が許可。村山等安、長崎の代官を許される。

*1605 村山等安が大村喜前(よしあき)と協議し、甚左衛門が治める長崎村を天領とした。甚左衛門は代償として時津村ほか 700 石をもらう話を断わり、久留米の田中吉政に仕えた。田中氏の断絶後は再び大村藩に戻り、横瀬浦 100 石を領し、1621 年時津に没した。

1607 第三は村山等安が息子のフランシスコ・アントニオ神父のために建立したサン・アントニオ教会で、本大工町にあり、助任はペトロ・クレメンテ神父であった。

第四はサン・ペドロ教会で今町にあり、主任はロレンソ・ダ・クルス神父、助任はジョアン・ルドビコ神父であった。トマス・ドス・アンジョ神父は司教館付で、7 人とも日本人であった。サン・アントニオとサン・ペドロ教会は 1607 年に建てられ、

1609 2 年後には韓国人のために、もう一つの教会サン・ロレンソが建てられた。その場所は、おそらく高麗町(現・鍛冶屋町)にあつたと考えられる。ミゼリコルディアの教会は増改築され、1603 年メスキータ神父によって建てられたサンティアゴ病院の聖堂は、イエズス会にゆだねられた小教区となった。被昇天の聖母教会は、司教座聖堂として利用された。他の修道会が長崎に入り、教会を建て始めたのは割合に遅かった。

1609 年、ドミニコ会のサント・ドミンゴ教会(現・桜町小学校、旧勝山小学校)

*1609 年、徳川幕府は有馬晴信に台湾偵察を命じたが、失敗に終わった。

*1609 対馬の宗氏と李氏朝鮮の間で己酉約条(慶長条約)が締結された。これにより、文禄・慶長の役以来断絶していた朝鮮との貿易が再開された。内容は朝鮮に日本から渡航する使者の資格や、歳遣船数を 20 隻に制限することなどを定めた。釜山に倭館が再建され、長崎出島の 25 倍におよぶ約 10 万坪の土地に、500

人から 1,000 人におよぶ対馬藩士・対馬島民が居留して貿易が行われた。明治初期の対馬藩の版籍奉還まで効力を持った。

*1609 マカオで有馬晴信の朱印船乗組員がマカオ市民と争いになり、家臣と乗組員の 48 人が殺される事件が起きた。怒った晴信は、マカオにおけるポルトガルのカピタン・モール(総司令官)であるアンドレ・ペソア(Andre Pessoa) がノサ・セニョーラ・ダ・グラサ号(マードレ・デ・デウス号)に乗って長崎に入港した際、船長を捕らえるべく多数の軍船で包囲。船長は船を爆沈させた。マードレ・デ・デウス号は今も長崎の港に沈んでおり、錨が引き上げられている。

*1609 島津氏が琉球王国に侵攻。

1611 年、フランシスコ会のサン・フランシスコ教会がクルス町(現・桜町)に建てられた。最後にサン・アウグスチノ教会が本古川町にできた。1601 年炉滓町に墓地が造られ、そこにもサン・ミゲルに捧げられた小聖堂があった。稲佐の方にも教会があったが、それについての詳しい記録は残っていない。浦上のサンタ・クララ小聖堂は 1606 年、大村の宣教師が追放された時、増築されて大村と浦上の教会になった。岬の教会側のサン・パウロ学院が次第に発展し、長崎文化の中心になっていた。毎年のご聖体の行列が荘厳に行われ、その他の祝日も盛大に祝われ、長崎の教会の特色であった。

*1611 長崎の人口 15,000 人。

*1612 山田長政が朱印船で長崎から台湾を経てアユタヤに渡ったという。

1612 年有馬の宣教師が追放された時、セミナリヨはトードス・オス・サントスに移された。ここでも教会が増改築され、その庭内には八代の殉教者の遺骨を納める小さな聖堂も造られた。この場所も巡礼地になっていた。

1612 年から有馬には殉教があった。長崎の教会の取り壊しが終わった後、直ちに長崎奉行・長谷川左兵衛が有馬に赴き、厳しい弾圧を始めた。とりわけ口之津には殉教者が多かった。大阪冬・夏の陣は長崎の信者にとって一休みとなった。豊臣秀頼の味方になった村山等安とその家族が処刑され、1617 年には大村で、1619 年には長崎で殉教があった。ここに、すべての殉教について述べることはできないが、主なところを記す(1622 年からの項に続く)。

1614 年 1 月 27 日、徳川家康が禁教令を發布し、長崎の栄光が突然終わった。この便りが長崎に届く少し前、2 月 16 日セルケイラ司教が死亡した。教区司祭たちは、サン・ペドロ教会に集まり、司教代理としてイエズス会管区長バレンティン・カルワリヨ神父を選んだが、すでに教会の最期の日が数え始められていた。他の地方から追放された宣教師たちが長崎に集まってきた。金沢から追放された高山右近、内藤徳庵とその家族、また、都の比丘尼たちも長崎に入ってきた。信者たちの熱心さが盛り上がり、4 月には神のあわれみを求めるため苦行の行列が行われた。11 月 7 日・8 日・9 日と宣教師や信者たちがマカオとマニラへ向かって出帆した。その船が出るや否や教会の取り壊しが始まり、15 日まで続いた。ミゼリコルディアやトードス・オス・サントスの建物だけが 1619 年まで残された。

*1614 長崎の教会 11 箇所が破壊される。

*1614 被昇天の聖母教会が破壊・焼却される。

*1614(糸割符宿老会所) 外浦町に糸割符宿老会所を置く。カーザ(生糸倉庫)を糸割符仲間が占拠。

*1616 長崎の人口 24, 693 人。

*1616 村山等安の台湾出兵。13 隻の艦隊を派遣、しかし琉球沖の暴風雨でバラバラになり、1 隻が台湾に到着するが、取り囲まれ乗員は切腹、全滅。3 隻は中国浙江省沿岸を荒らし住民殺害。2 隻は福建省沿岸に着き、人質をとり長崎に帰還。村山秋安の 3 隻は、ベトナム方面まで流され、帰還。

*1616 1604 年～1616 年を記録した異国御朱印帳によれば、島津氏は最大の朱印船貿易大名である。

+1616 ヌルハチ(清の太祖)、アイシン国(後金国)を作り、即位。

＊1618 30 年戦争が始まる。ドイツ内のキリスト教新旧両派の争いが西ヨーロッパの新教国・旧教国戦争へと広がって 1648 年まで 30 年間続いた。

＋1619 スルハチ、サルフの戦いで明・朝鮮軍を破る。

＊1619 村山等安、処刑。末次平蔵(政直)が長崎代官となる。

＊1622 オランダが明のマカオにあるポルトガル居留地を攻撃したが、敗退。

1622 年、長崎の大殉教があったが、(1627 に続く)

＊1624 オランダが台湾を占領し、熱蘭遮(ゼーランディア)城を築いた。オランダは台南の安平をタイオワンと呼び、寄港する外国船に 10%の関税をかけた。中国商人はこれを受け入れたが、浜田弥兵衛(長崎代官、朱印船貿易家である末次平蔵の配下)ら日本の商人は拒否(タイオワン事件またはノイツ事件)。これに対し、オランダはピーテル・ノイツを台湾行政長官に任命し、1627 年將軍徳川家光との拝謁・幕府との交渉を求め江戸に向かわせた。末次平蔵も動き、結果としてノイツの家光への拝謁を阻止、ノイツは成果なく台湾に戻った。その後 1628 年タイオワンのノイツは浜田弥兵衛の船の渡航を禁止して武器を取り上げたが、弥兵衛は隙をついてノイツを組み伏せ人質にとった。その後末次平蔵らは平戸オランダ商館を閉鎖する。

1627 年まで長崎の信徒の組織は残っていた。その年、最後のキリシタン乙名・町田と後藤は江戸に追放され、他の信者のリーダーたちはマカオに流された。その後、奉行竹中采女正の圧迫の下に長崎の教会が破壊された。クルス町牢(元サン・フランシスコ教会跡)には、宣教師や信者たちが入牢され、そこから殉教地西坂まで引き連れられた。

＋1628 鄭芝竜(鄭成功の父)、明に投降して福建の海防遊撃に任じられた。芝竜は、福建、台湾周辺の海上交通を押さえオランダ人とも組んで貿易や海賊行為で活躍した。芝竜は、閩南語(福建南部の方言)、南京の官語、日本語(平戸藩士の娘が妻)、ポルトガル語、オランダ語に通じていたという。

＊1632 長崎－マカオ間のポルトガル船による貿易量が 800,000 両。

＊1632 アユタヤ日本人町(14 世紀中ごろからあったタイの日本人町)が焼き討ちされ、滅亡。アユタヤは、関ヶ原の戦い、大坂の陣などの後、実戦経験豊富な日本人兵を傭兵として雇い入れた。堺からは多くの刀が輸出され、改造され流用された。日本は銀によって、アユタヤから陶器、皮革製品(主にシカ、サメなど)、キンマ塗りなどを買った。

1633 年には特に長崎の教会にとって殉教者が多い年であった。一年後には出島の建造が始まり、1636 年に完成した時、信者と潜伏宣教師の最後の拠り所がなくなってしまった。それまで、ポルトガル人たちの家は秘密の教会の役割を果たしていたが、ポルトガル人が出島に閉じ込められ、キリシタンたちの姿が消えてしまった。

＊1633 火事によって本博多町にあった奉行所が被災、この火事で糸割符会所も類焼。

後に(1635)奉行所を旧県庁跡地に移転。

＊1634 出島の築造を始める(1636 年にできあがる)。

浜下武志によれば、清朝の海禁政策であれ、また徳川幕府の貿易制限政策であれ、17-18 世紀に見られた旺盛な交易熱・移民熱に比べて、モノやヒトの移動の一部分を管理・制限しえたに過ぎない。貿易商たちは、武装して貿易をおこない、また漂流船の形で交易したという。

＊1634 長崎の眼鏡橋完成。

＋1634 ホンタイジ(清の太宗)モンゴル遠征。

＊1634 長崎－マカオ間のポルトガル船による貿易量が 490,000 両。

＊1635 日本人の海外渡航と帰国を禁止、外国船の入港地を長崎 1 港に限定。

＋1635 長崎－マカオ間のポルトガル船による貿易量が 1,500,000 両。

＋1636 ホンタイジ、大清国皇帝として即位。

- *1636 長崎ーマカオ間のポルトガル船による貿易量が 2,350,000 両。
- 1637 年～1638 年 島原の乱がおこり、その結果、有馬の教会は全滅した。潜伏した信者たちが浦上、西彼杵、平戸などの村々に逃れて信仰を守り続けたが、時には地方への弾圧があつて、キリシタンの血が流された。
- *1637 長崎ーマカオ間のポルトガル船による貿易量が 2,600,000 両。
- *1630 末次政直(平蔵)、江戸の牢獄で死す。
- *1638 長崎ーマカオ間のポルトガル船による貿易量が 1,259,000 両。
- *1639 オランダ商館長のフランソワ・カロンが江戸に参府し、ポルトガルとの関係断絶を幕府に申し出た。
- *1639 江戸幕府はポルトガル船の日本渡航を禁止。
- *1640 ポルトガルの使節が貿易再開を求めてマカオから長崎に渡来。幕府は、ポルトガル使節を処刑。
- *1640 ポルトガルは独立を回復するが、衰退が進む。
- *1641 平戸のオランダ商館を出島に移す。
- +1644 大順王を称した李自成軍に北京をかこまれた崇禎帝が自死、明の滅亡。満州族の清に対して山海関を守っていた明の呉三桂が、清に投降、清軍を先導して北京入城を助ける(呉三桂の動きの背景に陳円円という女性がいた)。
- +1644 ドルゴン(清の摂政)、山海関を越えて北京入城。清は首都を北京に遷し、中国支配を始める。
- +1646 鄭成功は永暦帝を奉じて「反清復明」活動を継続。父である鄭芝竜は清につき、鄭成功の懐柔を命じられたが応じず、1661 年に北京で処刑された。
- *1647 オランダ商館長 W.フェルスデーヘンが将軍に地球儀を献上しようとしたが、大目付井上筑後の守は、世界に比べて日本があまりに小さく見えるという理由で、断った。
- +1648 ウェストファリア条約締結。世界最初の近代的国際条約で、三十年戦争を終結させた。これにより主権国家体制が確立し、しだいに国民と領土が明確にされ、国民国家が形成されていく。
- +1650 南明の永暦政権、バチカンに援軍を要請。
- *1650～82 年のイマリの最盛期に少なくとも伊万里焼 400 万個を上回る量が輸出された。これはオランダ商館経由と中国への輸出分を合計したものである。このイマリの誕生に鄭氏一族による技術・原料・販路の組織的管理が重要な役割を果たした。1630 年代から 1684 年までに来日した中国船は、そのほとんどが鄭氏一族の直接、間接の影響下にあった(武野要子)。
- *1652 僧玄澄が長崎奉行黒川与兵衛などの援助によって徳川家累代霊牌安置所として安禅寺(地図参照)を建立。明治元年に東照宮と改めた。
- *1659 長崎の人口 40,700 人
- +1661 鄭成功、オランダ人支配下にあった台湾のゼーランディア城を占領し、台湾を占拠。
- +1662 鄭成功、病死、39 歳という。そのあとは子の鄭經が継いだ。
- *1663 長崎で大火。66 町のうち全焼 57 町、半焼 6 町。
- *1667 倉田次郎右衛門、給水工事に着手(倉田水樋)。
- +1673 呉三桂挙兵、三班の乱(～1681)。
- *1676 長崎代官末次平蔵茂朝は抜け荷の罪により、しかし罪名を投銀(なげかね)として、隠岐に流罪。長崎代官と手代たちは、鄭成功の抗清活動に協力し、ひそかに武器を送っていた。幕府は鄭氏の援兵要請を受けていたこともあり、国益のために武器を渡したと主張する平蔵を殺さず、流罪にした。
- +1683 鄭成功の孫の鄭克塽、清に降伏。清が台湾を併合。台湾が大陸政権支配下に初めて入る。
- +1684 清が海禁解除。
- *1688 長崎へ入港したいわゆる唐船 194 隻(または 193 隻)、これが最も多い入港記録。

福州船 45 隻, 寧波船 32 隻, 厦門船 28 隻, 南京船 23 隻, 広東船 17 隻, 泉州船 7 隻, 潮州船 6 隻, 広南船 5 隻, 普陀山船 5 隻, 台湾船 4 隻, 高州船 4 隻, 咬啣吧(ジャカルタ)船 4 隻など。

+1688 イングランド, 名誉革命。「権利の章典」が發布され, 国王の権限が制限され, 議会政治の基礎が築かれ, イングランド国教会の国教化が確定し, カトリックの復権の可能性がなくなった。

*1689 唐人屋敷が完成。

アメリカ大陸と日本からの新しい貨幣(銀)の供給の増大は, 生産および人口の成長を, 中国南部でもっとも劇的に現れたように, アジアの多くの地域で刺激した(アンドレ・グンダー・フランク)。

1400 年から 1800 年の期間, 世界経済は圧倒的にアジアの影響下にあった。中国の明朝／清朝, オスマン・トルコ帝国, インドのムガル帝国, サファヴィー朝ペルシャ帝国は, 経済的および政治的に強力だった。近代世界システムの経済的蓄積と政治的パワーは15～18 世紀の間, 特に中国, 日本, およびインドが全体として第一の地位を占めており, 東南アジアおよび西アジアがそのすぐ後ろにあった。赤字漬けのヨーロッパは, 世界経済において明らかにアジアほどの重要性をもたなかった。

世界人口(ヨーロッパ人口と同様)は, 14 世紀に減少し, 1400 年以降上向きになって成長を開始した。世界人口は, 15 世紀に約 20 パーセント伸び, 16 世紀には約 10 パーセント増加した。コロンブス上陸以降のアメリカ大陸では急速に人口が減少したが, それを差し引くと, 世界のその他地域では 16 世紀に 16 パーセントの人口の伸びを示していた。その後世界人口の伸びは加速して, 17 世紀には 27 パーセント, アメリカ大陸を除くと 29 パーセントの増加となった。17 世紀中葉は一つの転換期となり, 1650 年から 1750 年の 1 世紀で世界人口は 45 パーセント伸びた。このような世界人口の有意な増大は, それに伴う生産の増大に支えられており, 貨幣の世界的供給および流通の増大がその動力になった。

人口の伸び率は, アジアの重要な諸地域・諸経済においてどこよりも急速であった。すなわち中国と日本では, 1600 年から 1750 年までの 1 世紀半でその伸びは 90 パーセントを超えている。人口増加が比較的遅かったのは, 西洋およびおそらく中央アジアとアフリカで, 人口が減少したのはアメリカ大陸だけであり, メソ・アメリカのマヤやアステカ文明の人口は 1650 年までに 2500 万人から 150 万人に減少, アンデスのインカ文明でおそらく 900 万人から 60 万人にまで減少し, 1750 年になってゆっくりと増加するようになった(アンドレ・グンダー・フランク)。

崩れと呼ばれる主な迫害は次の通りである。

1657 年大村の群崩れ, (年を修正, 大村藩の郡村(郡川近くの松原村・竹松村・福重村など)

1790 年浦上一番崩れ,

1839 年浦上二番崩れ,

1858 年浦上三番崩れ,

1867 年～1873 年浦上四番崩れ。この最後の崩れの時, 五島列島や大村領の三ツ山などにも弾圧の手が伸びた。

長崎教区では至る所に殉教者の血が流れたが, その主な殉教地は, 長崎市西坂, 雲仙の地獄と大村放虎原であった。その他にも記念碑が建てられ, 巡礼地になるいろいろな所がある。例えば, 平戸の生月(ガスパール様, 中江ノ島), 田平焼罪, 五島久賀島の牢屋の窄, 西彼町小干浦, 大村の鈴田牢跡, 島原の今村, 南有馬の原城などなど。

このように殉教者の証を見てきた長崎で,

1865 年 3 月 17 日, 出来上がったばかりの大浦天主堂にてキリシタンが発見された。長崎の教会は新しい道を歩み始めた。

*1862 アメリカ監督教会(聖公会)の C.M. ウィリアムズによって文久2年(1862)9月, 東山手 11 番地に建設された英国教会堂は, 日本初のプロテスタントの教会。

安政の開国直後の長崎の町を取り仕切った奉行岡部駿河守が創設した「英語伝習所」は, 開国当初, 日本人への布教が許されていなかった外国人宣教師達の良き就職場所となる。

最初に長崎に派遣されたのは, アメリカ監督教会(聖公会)の宣教師リギンズ。その後, 後に日本聖公会初代主教となる C.M.ウィリアムズや近代日本建設の父といわれるフルベッキなど, プロテスタント教会の宣教師達だった。当初まだ日本人に対する布教活動は認められておらず, 居留地内で礼拝を行うとともに, 自ら日本語を学び, 英語を希望者に教え, 医療活動に従事していた。

*1873 明治6年の禁教令の高札撤去以降, 医療, 社会事業, 教育活動を通じた布教活動が開始される。その中に, プロテスタント教会による女子教育への取り組みもあった。

文献:以下のほか Wikipedia など。

○高瀬弘一郎(2021), キリシタン時代の文化と諸相, 八木書店, pp.7-10 に当時のイエズス会本部の経済基盤の3分の2以上が貿易収入, 主要部分はマカオ＝日本間の生糸貿易であった旨, 記されている。

○https://www.nagasaki.catholic.jp/?page_id=95「長崎の教会」(2020 年 11 月 30 日閲覧)

○<http://www.city.nagasaki.lg.jp/nagazine/hakken1302/index.html> (2020 年 11 月 30 日閲覧)

○宮崎貴夫(2020), 万才町遺跡の発掘から見えてきたこと, 片峰茂監修, 長崎の岬 II ―長崎の記憶をほりおこす, 長崎県境跡地遺構を考える会発行, 長崎文献社

○岡本隆司(2020), 「中国」の形成 現代への展望, シリーズ中国の歴史⑤, 岩波新書

○壇上寛(2020), 陸海の交錯 明朝の興亡, シリーズ中国の歴史④, 岩波新書

○平川克美(2020), 株式会社の世界史 「病理」と「戦争」の 500 年, 東洋経済新報社

○デ・ルカ・レンゾ(2019), 長崎のイエズス会本部とその影響 ―そこで活動したイエズス会員を中心に―, 平和文化研究 第 39 集,

○松下志朗, 下野敏見(2002), 鹿児島県の湊と薩南諸島, 吉川弘文館

○浜下武志(2013), 朝貢システムと近代アジア, 岩波オンデマンドブックス

○アンドレ・グンダー・フランク, 山下範久訳(2014), リオリエント アジア時代のグローバル・エコノミー, 藤原書店

○武野要子(2000), 博多 町人が育てた国際都市, 岩波新書

○長崎県教育委員会(1995), 長崎県文化財調査報告書第 123 集 万才町遺跡 長崎県庁新別館建替えに伴う発掘調査報告書